

「江戸から見直す民主主義」の読後感

布施修一郎(6組)

この本の趣旨は、明治維新(薩長)の政府が江戸文明を否定したことが現在の日本政府にまで繋がり、やや権威主義的になりつつあることへの警鐘であり、良い悪いはともかくとして、かなり過激な左がかった主張とも捉えられるかも知れないものと思いました。というのも、著者の一人、田中優子氏が新聞のコラムやネット上で、この本の紹介とともに現高市政権が明治以来続く薩長による政治を継承し続けており危険が感じられると主張された文面をすでに目にしていて、先入観があったからかもしれません。

私達は、江戸時代は土農工商の身分制度に束縛された自由のない社会で、儒教は封建的教義であったと教えられてきましたが、そうではなく、意外と民主主義的思考を持つ人々が多く、その代表には普通選挙を提唱した上田松平藩士の赤松小三郎などが存在し、その背景には、寺子屋などの充実した教育制度があり、その寺子屋の教え方が一律教育体制ではなく個別指導が中心だったこと、武士の世界での教育システムも同様であったことに由来しているのではないかとされています。赤松小三郎の普通選挙による議会民主主義は、江戸時代に村々で自然発生的に行われてきた村役人の入札による選出、村人全員参加の寄り合いによる十分な話し合いによる議会の様な形のものの存在が影響していたと思われるとしています。また、儒教の本来の姿は、合理的な考え方からなるもので、封建的なものではなかったとされています。私たちが、当たり前使用前に使用してきた多数決の原理よりも、難しいかもしれませんが時間はかかっても話し合いにより全員の賛同を得ることの重要性が訴えられており、現在、世界中の民主主義に翳りが見え始めていることに対して、江戸時代の文明を参考にすることがこの本の帯に記されているように民主主義のリニューアルに繋がることに期待した書籍と強く感じました。また、この書籍に限らず、最近、幕末・維新の歴史の見直しが広く言われており、現在映画化が進められている上田松平六代藩主の松平忠固の業績を明らかにする後押しになってくれば有難いと思う次第です。

この本を、眼科受診の待ち時間に読んでいましたら、表紙を見て声を掛けてくれた患者さんがいました。大ヒットしそうな気配が感じられます。